
自分はここにいる

東 風林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分はここにいます

【Nコード】

N6654C

【作者名】

東 風林

【あらすじ】

美人双子兄妹に振り回される少女との、ただのコメディ小説……ではない。その双子にはある秘密があったのだ。

第一話 ハジマリ

自分らしく生きなさい、と大人は言う。

でも自分が自分らしく生きていると、変な事をするなど大人が言う。

嗚呼、自分らしくってどういう事？

自分という型に当て嵌まって形を作られながら生きるって事？
わかんない。わかんないよ。

自分はここににいるのに、誰もそれに気付かない。そうさせたのが皆なのに！

「ねえ、今度は大丈夫かなあ？」

雲一つない青空の下、それとは反対に不安を胸に秘めながら弱々しく、その人物は隣に話し掛ける。

大きな校門の前だった。『菜恋后癒学園 中等部（サイレンコウユガクエン チュウトウブ）』と金の字で書かれた石の前に立つ人影は二人だけ。長い黒髪を靡かせる子と、その隣にいる黒髪に短髪の子。背格好はとてよく似ていて、双子であろうと思われた。

「大丈夫だろ。……多分」

質問の返答にもどこことなく力がない。無理もないか、と溜息を吐く。

「なんだよ、その顔……仕方がないな。じゃあ、こうしないか」

相手はこちらに向き、目を輝かせて言った。その目は希望に満ちている。何？ と問い掛けると、耳に唇が寄せられた……。

六月三十日、朝八時。学園内にはたちまち噂が広がっていた。今日双子の姉弟が転入してくるらしい、と。口コミの力はなかなか侮

れない。

その広がり方といったら……、調子の悪い時のネットに比べたら、断然速いだろう。

そもそもこの学園に中等部から転入して来るなんて、あまり例はない。夏の始めになんて時期的にもおかしいし、随分と急な話だ。

故に、二人は学園に来る前から有名人だった。

「双子の男の方、ウチのクラスに来るみたいよ！」

誰が最初に言い出したのか、恐るべし人間の情報網。私の耳に入っただのは一体何人に回った後だったのだろうか？

そんなこんなで、担任が転入生を紹介する頃には、私——だけではなく皆の興奮はピークに達していた。

「山賀^{ヤマガ} 光^{ヒカル}です」

どうやらこの短髪の子が、噂の双子の弟らしい。男子が来れば私もその他の女子も騒ぐのは必然だった。何故って？ なんてったってこの学園には男子が少ない。そして男子さえも息を呑む程、その顔は整っていた。

隣のクラスではほぼ同時に、双子の片割れが自己紹介をしていたようで、歓声が壁^{ハルカ}ごしにも聞こえてくる。

もう一人の名は遥^{ハルカ}と言った。光に負けず劣らず——……とは言っても同じ顔をしているが、こちらでもまた男女関係なく見とれる程の顔立ちだった。

ああ、そうそう、とりあえず『私』の紹介もしておこう。私は前^ま野^{えの} 悠音^{ゆうね}。一躍有名人となった双子の一人・光と同じクラスになった普通の女の子。平凡な生活を送る一介の中学生。

うん、じゃあそろそろ、私も山賀 光に話し掛けてみようかな。だって彼、とってもカッコイイんだもの！

でもこの時、私は何も知らなかったんだ。光と遥の秘密を。

と言うより……最終的に知らない人の方が多いのだし、私だって知らない方がよかった。

だって二人が……ああ、いや、これは、言わないでおこう。
いずれ知る事になるのだから。一部の人は。
貴方は知る人と知らない人、どちらになるのかな。

遥は放課後になると、真っ先に光の元へ駆けて行った。恥ずかしそうに、言いにくそうに、それでいてスツキリとした声でその名を呼ぶ。

その声に気付いた光は、少し苦笑して手を振った。遥が傍に来る。二人は目を合わせて微笑んだ。

「……ね、ボク、ちゃんと話せたかなあ？」
と、遥。

「大丈夫じゃねえの？ 何も心配しないで振る舞って大丈夫だぞ、……遥」

光の言葉に遥は顔を赤らめて頷く。長い艶のある髪がサラリと音を立てた。

「で、さ。あのね、光……明日……」

「わかってるよ。身体検査だろ」

そう言って、光は笑う。心配するなど、遥の頭を撫でた。綺麗な髪がクシャクシャになって、遥は慌てた。

「でもな、正直俺達だけじゃ無理があるな……完璧にやるには」

そこまで言って初めて、光は背後に誰かの気配を感じる。一瞬で振り返って、その鋭い眼光をその人に向けた。

それが、悠音だった。

特に彼女は二人の会話を盗み聞きする気はなく、光に忘れ物を渡そうとしてただで、ただ会話を邪魔してはいけなそうと思ってそこに立って待っていたのだが……それが裏目に出た。

悠音の運命を変えたのは、恐らくこの瞬間だろう。

「……何だ、お前は……聞いてたか？」

「は、っ？ 何を？」

惚けた覚えはない。悠音は天然なのだった。遥は黙っている。美しい表情に不安の色を浮かべて。

「だから、俺達の会話だよ」

それほど低くない声なのに、妙な凄みがある。でも会話なんて声が少し聞こえたが内容は全然わからなかった。

「知らないわよ」

「ふん、どうだか」

本当の事を言ったら即刻否定された。

「まあどっちにしろ安心はできねえな……しょうがない、こいつも共犯者だ。な？ いいだろ、——遥」
え？

いや、ちょっと待て、何がどうなってんの！？

悠音がそう言葉にしようとした瞬間に、遥が口を開いた。

「ボクは誰でも構わないけど……」

「よし、決まりだ」

勝手に話が進められる。

ロクでもない不安が悠音を過ぎった。

そう……これが私の——じゃなくて私達の、始まり。

今思えば、これが始まりだったのだ。

第二話 ユウワク

放課後、学園に人影はなかった……たった三人を除いては。

ぐいぐいと手を引かれ、屋上へ連れていかれる悠音と、その手を引いている光、そして最後尾でちょこちょこついてくる遙。

「ちょっと何よ、何なのよ！」

悠音は思いつき口を尖らせる。ああ、このままじゃあ私の唇が某人気アニメのサブキャラ自慢少年になってしまう！ これは明らかに誘拐だ。犯罪だ！

するとしばらく黙っていた二人が、突然こちらを向いた。全く同じ整った美しい顔。最初から分かっていた事のはずなのに、悠音は息を呑む。

その光景はまるで写真や絵のように、切り取ったような美しさを帯びていた。

「お前が会話を聞いていようといなかうと、もうどうでもいい。どっちにしろ協力してもらえば同じ事だし、この時点でお前に逃げ場はねえ」

だから、その協力ってのが妖しいんでしょうが！

「前野さん……ボク達だけじゃあ、秘密を守るのが難しいの。ね、協力……してくれるよね……？」

くっ、こっちは甘えた声で来やがった！

悠音はむうう、と唸る。逃げ場はないっていうのは本当らしい……：第一放課後の学園で、逃げようたって助けてくれる人もいない上に相手は二人だ。

遙の潤んだ眼差しが悠音の強張った表情を和らげる。ふいに、悠音の顎に細い指が触れた。

ハッとした瞬間には既に鼻がくっついてしまいそうな距離に、光の顔があった。その位置のまま表情を微塵も変えず、形のいい唇から言葉が流れてくる。

「たいしたことないから、俺達にちょっとだけ手を貸してくれよ？
前・野・さ・ん」

自分の体温がどんどん上昇しているのを、悠音は感じていた。やばい、このままじゃ倒れる……！

「あ、ああの、とっとりあえず離れ……」

「頷いてくれたら離れてやるよ」

ほんのわずか、また光の顔が近付いた。お互い息が相手の顔にかかっているし、何より自分の心臓の鼓動が聞こえているのではないか。

横目で遙に助けを求めたが、この光景が恥ずかしいのか何なのか、遙は壁の方を向いていた。

ああ、もう！

訳も解らず、悠音は首を縦にぶんぶんと振る。ゴツンと二人の額がぶつかった。あまりの痛さにおでこを押さえて座り込む。

「ったあ……協力するからっ、もうこんな事やめてよね！」

その瞬間、光が誇らしげな笑みを浮かべる。私はまんまと作戦にハマったって訳か。その顔を睨み付けて、悠音は横を向く。

遙はこの上ない笑顔で、悠音を見ていた。

……くそ、やられたッ！

「なんて奴らよ……」

「えっ、酷いよ前野さん……ボク、何もやってない……」

確かに何もしてないわね。

でも端から知ってて助けなかったんでしょ……って、当たり前か。

「とにかく、だ」

光が悠音の背をポンと叩いた。心臓が跳ね上がる。さっきの何秒かが頭から離れない。頬が熱い。ドクドクと音が聞こえる。

「協力その一。明日の身体検査の10分前、俺達は隣の視聴覚室にいる。お前はその間視聴覚室の周りを見張って、誰も中に入れるな。……あ、もちろんお前も覗くんじゃねえぞ」

なんという理不尽な申し付け……。

しかし理由も何も教えようとせず、一方的に内容だけを押し付けたのだ。よっぽど重大な秘密があるのか。悠音はそっぽを向く。

「もしも私が覗いたら？」

「ああ、その時は」

光が遙に目をやる。

遙はいつの間にか携帯を手にしていた。画面には、さっきの光景。

「俺が改造しといた。音が鳴らないで写メが撮れるんだぜ」

今の悠音には光の言葉など耳に入っちゃいない。

見ようと思えばキス直前、にも、見える。まさか、まさかね。いや、でも脅しとしてはこういう事だろうなとは思いつつも、悠音は恐る恐る確認した。

「まさか、これを全国発信と？」

「いや、可哀相だからまずはクラス内だけに留めといてやるか」
無駄な情けだ。一日もあれば学園中に回る。

「……忠実に協力させて頂きます……」

今の悠音は、その言葉しか出せなかったのだった。

第三話 ヒミツ

早まった選択をしてしまった気がする……。

悠音は肩を落として二人の間を歩いていた。光はいかにも勝ったような顔をして、携帯なんかいじっている。

遥はというと、さっきまでとは一転真剣な表情で、前を向いていた。真面目に固い表情をした遥を見ると、本当に光と同じ顔をしている。

「あの――」

間が持たなくなつて、悠音が口を開いた。二人は顔を上げた。言葉が続かない。悠音は目を光と遥に交互に向ける。

「えーと、さ……協力するのは、いいんだけど」

光が目を細めた。

「何？」

「あんたらが何を隠してんのか、私には知る権利があると思う」
目を合わせずに、早口でそうまくし立てる。

遥が光を見た。沈黙。

それを破ったのはしばらく後の、光の言葉だった。

「知る権利？ そんなもん、どこにあんだよ」

静かな声だった。それでいて、ゆっくりと。

「だって！ 私がその秘密を外に漏らさない手伝いをするんでしょ？ その私が知らない秘密なんか」

「黙れ」

さっきよりも若干低くなったその一声に、悠音は口をつぐむ。誰も信用していないような声だ。この人は一体今まで何を背負って来たのだろう……。

「……教えてあげても、いいよ」

突然の光の言葉を覆す一言は、遥のものだった。二人の視線がぶつかる。そしてそこから目を逸らし、遥は悠音に向き直った。

「でも、前野さんだけに教えるって事は……もしも他に秘密が漏れたら、前野さんのせいだって断定していいんだよね？」

頷けない。

それは秘密を知る事で、秘密が外にばれる事への全責任を負うという事。

再び静寂が訪れる。しばらく三人は下を向いていた。

「つまりは、そういう事だ。頷けないだろ？　ならお前に知る権利はねえ」

頷けなかった悠音には最早、反論の余地はなかった。ここで秘密を知りたいと言っても、周りの野次馬と同じに思われてしまうだけだろう。

悠音は俯いていた。

「前野」

光が呼ぶ。

「お前さ、自分らしく生きるってどういう事だと思う？」
「えっ？」

全く話題の違う問い掛けに、悠音は思わず声を裏返す。

しかし光の目は真剣だった。

チラッと隣に視線を移す。真剣な眼差しは遙も、だ。

この二人は何を、どんな答えを期待してる？

「えっと……誰かの真似をしたり自分を隠したりしないで、自分は自分だーって言いながら生きる、みたいな？」

めっちゃくちゃになってしまったが、急にそんな事を聞かれても分からない。

「お前はそうやって生きてるか？」

思いがけない質問だった。

嗚呼……何を聞きたいのか、全く解らない！

それでも悠音は少し考えてから、深く頷いた。

「私は何の取り柄もない普通の女の子だから、ちょっとの個性でも表現しないと、すぐに他の人に埋もれちゃうんじゃないかって思

う。アナタはこういう子だって型を渡される前に、自分で型を作らなきゃいけないって……まあそういう私も、人に流されちゃう事とか沢山あるけど」

質問をしたくせに、光は何も言わなかった。どこか淋しげに、悠音を見ている。

遙は下を向いていた。その場が動かない空気に包まれ、誰もが息を留めているのではないかというほど、時が流れていないのではないかなにかと思うほど、微塵も動きを見せない。

「さて、帰るか」

ことごとく人の話を無視しやがる。

真面目に答えた自分が馬鹿みたいだ。悠音は光を思いっきり睨み付ける。

しかし光は既に二人に背を向けていた。後からトコトコと遙が追い掛ける。そして、遙は少しだけ悠音の方を向いて、笑った。

「ありがとう、真面目に答えてくれて。いつも皆ナニソレって笑って、答えてくれないの」

可愛い笑顔だった。

つられて悠音も微笑む。光はもう随分と先を歩いていた。

「じゃあ」

「うん」

別れを告げ、遙はその背中に追い付こうと走り出した。黒髪が靡く。空は夕焼けに染まっていた。

さて、と。私も帰るとするか。

悠音は欠伸を一つすると、反対の方向へと足を進めた。

遙が光に追い付いた頃には、もう家のすぐ近くだった。

「ね」

息を切らしながら、遙は言う。なんだよという素っ気ない返事に、

首を竦めた。

「なんか、かなしいね」

「……うるせーな」

そう言う光の声も、微かに震えていた。遥は俯き、光の服の裾を軽く掴む。

二人は家の前まで来ると、一瞬だけ目を合わせた。

「そーいや明日の例のモノ、ちゃんと用意してあるか？」

「うん」

笑顔で遥は頷く。しかしその笑顔は、さっき悠音に見せたような明るいものではなかった。

そんな二人の声から切なさは、まだ消えていなかった。

第四話 トモダチ

光と遙が視聴覚室に入ったのを確認し、ドアを閉めると、悠音はその前に立った。まるで警備員だ。なんでこんな事してるのかなんて、自分でも分からない。

少し話し声が聞こえる。ただ、会話の内容までは聞き取れなかった。

5分とかからずに、二人が出てくる。光は『ご苦労』なんて言つて悠音の頭を軽く叩いた。遙は相変わらずニコニコとしている。

「もう用事は済んだの？」

「ああ」

ぶっきらぼうに答えて、二人は先に行ってしまった。邪険な扱いにムツとしながらも、悠音は後を追いつける。

仕方ないか。脅されて協力してるだけだし。

男子と女子はここで分かれるようだ。光は二人に別れを告げると、手前の教室に入っていく。遙と悠音は顔を合わせて、隣の教室へと進んだ。

「間に合ったみたいね」

「うん……ちょっと恥ずかしいなあ」

遙がそう漏らす。体重なら私だって計りたくない。内科の先生に服の下を探られるのだって嫌だ。なんだっけ、あの心臓の音を聞く道具。小さい時はモシモシって言ってたけど。

少し経って、遙が呼ばれる。悠音は一人になり、長い溜息を吐く。昨日から、色々と急な事がありすぎた。そのせいで悠音の生活が少なからず狂った。さっきだって、いつも一緒にいる友達の誘いを断ったのだから。

まあ、だからって別に、二人が嫌いな訳ではないのだが……あ、光はムカつくな。

光の表情が浮かぶ。誰も信用していない瞳を。

あんなに、秘密を隠そうとしなくていいのに。誰かの助けが必要なら、事情を話して協力してもらえばいい。

それとも、私を口の軽い人間だと思ってる？

「前野さん」

先生に名前を呼ばれ我に返った悠音は、心なしか顔をしかめて、体重計の方へと向かったのだった。

「遥」

隣の教室から出てくると、光は真っ先に遥を呼んだ。遥は顔を上げ、悠音の手を引いて駆けて行く。

「体重何キロだった？」

なんてデリカシーの無い奴だ。こんな可愛い女の子に体重を聞くなんて！

しかし躊躇う事なく、遥は答える。

「38」

「やっぱりビンゴ。俺も」

その身長で38キロ？ 悠音は思わず叫びそうになる。しかも二人共だって？

ふいに光がこっちを向く。馬鹿にしたような笑みを浮かべて、悠音に言葉をかけた。

「お前は？」

誰が答えるかッ！

しかし遥の携帯を奪いあの画像を表示させた光を見て、悠音は澁々と教えるハメになったのだった。

嗚呼、誰か私を助けて。

「もーヤダっ……あいつ絶対バラす気よね」

再び光と視聴覚室にこもり、そして出てきた遙に向かって悠音は溜息のような声で呟いた。遙はクスツと笑って、

「そんな事ないよ。……光は、お友達ができて楽しいだけなんだよ。だから誰にも言わないよ」

……いい子だ。

でも、お友達という言葉には賛成しかねる。あいつは私を下僕、パシリ、召し使いとしか思っていないだろう。

頬を軽く膨らませる悠音を見て、遙はそれを可愛いと言った。そして悠音の手を掴む。一緒に帰ろうと言いながら。

うーん、可愛いのは貴女です。

こんな妹が欲しかったな。

「……ね、前野さんの事、悠音ちゃんって呼んでもいい？」

そう顔を赤らめて問い掛ける。

「ええ？ 全然構わないよ？ 呼び捨てでもいいし」

「よ、呼び捨てなんて……できないよ」

すぐに真っ赤になる。

悠音はつかの間の幸せに浸っていた。

同じ顔なのに、なんでこんなにも違うんだろう？

でも、と、悠音は思った。

こんなにも同じ顔の二人だから、見分けをつけさせるためにも、性格が正反対じゃなきゃいけなかったのだろうか。光は光、遙は遙。その区別は、髪を除いてはこの性格と表情の差だけと言っても過言ではないのだ。

だからってあんなにひねくれた光の性格を許した訳じゃない。なんでもかんでも人の弱みに付け込んで……自分の顔を道具としか思っていないんじゃないの？

進路の第一希望は『ホスト』が最も相応しいわね。

「ところでね」

少し言いくさそうに、遙が呟いた。

物思いに耽っていた悠音は、ふと顔を上げる。

「明後日は……その。プールがあるでしょ？　その時も、また……
ゆ、悠音ちゃんにお願いしていいかなあ？」

顔の前でちゃんと手を合わせる遥。遥のお願いなら、と、悠音は
笑って頷く。

身体検査にプール。どうやら保体に関係ありそうだが、明日の体
育で二人が視聴覚室に行く必要はないらしいところを見ると、そう
ではなさそうだ。

まあ、あまり関与すると光と私ができてるなんて噂が飛び回って
しまう。考えるのは止めよう。

第五話 フタゴ

いつだって俺達は、自分を偽って生きて来たんだ。
自分の存在を認めてもらうために。

「あのね、今日ね悠音ちゃんがね」

光よりも後に家に到着した遙は、まずそう話し始めた。友達のことを話す遙のこんな嬉しそうな表情を見たのは初めてだった。

話を聞いて頷きながら、光は目を細める。その内容はあまり頭に入って来ない。

ふいに、昔の自分と目の前の遙が重なって見える。

たまに、自分が誰なのか分からなくなる時があった。それは遙も同じだろう。光は鏡を見る度自分が誰なのか分からなくなり、遙を見る度、自分が『光』だという事を思い知らされた。結局人間は、誰かに自分の存在を作ってもらわないと生きていけないのだ。自分の名前を最初から知っている人はいない。自分だって、お前は『遙』だと言われたら、そう生きて行くのだ、きっと。

しかしそれは許される事ではなかった。自分は『遙』で生きては行けないのだ。

遙も『光』では生きられない。それは許されない。

そう、きつと一生。

「でね。……ね、聞ってる？」

軽く口を尖らせる。

光はふっと表情を綻ばせた。

「聞ってるよ。で、前野がコケて何だって？」

「もう！ 悠音ちゃんはコケてないよ」

そう言って頬を膨らます遙を見て、光は笑みを漏らした。

ああ、これが普通の生活なんだな。

お互い話もせず、食事さえ暗かったあの時を思い出す。ここに転

入して初めからやり直して、本当によかった。

遙もきつと、この生き方が自分に相応しいと思っているに違いない。

そう、……俺が思っているのだから。

「最近お前、前野の話ばかりだな」

「……他に誰の話をするの？」

遙の表情が陰る。

周りの野次馬と友達になろうなんて思っていない。前野と一緒にいるのは、あいつが扱い易そうでもともな、自分達の秘密がバレても受け入れてくれそうな奴だったからだ。

故に、遙が友達と認識しているのは前野だけなのだろう。

「……そうだな……悪い」

遙は愛らしい笑顔で微笑んだ。

「ちょっと光！ あんたそれ、私のパン！！」

購買で買ったお気に入り的人气商品は、何故か光に渡っていた。

「人を勝手に呼び捨てにした罰だ」

ふん、と鼻で笑って、光は袋を開ける。

女の子らしさのカケラもない大声で、悠音は叫んだ。

「ちよつと——！！！」

「じゃあさ、跪ずいて光様って呼んでみな？」

何がしたいんだ、こいつは！

なんでこいつはこんな事ばかり……！

「……そんな事してまで欲しくないわよ」

「へー。そう」

光は袋からパンを取り出す。それを悠音の鼻の先に突き出して、

「欲しい？」

と嫌味な笑顔を浮かべた。

「い、いらないわよ！」

「まあまあ。頑張って買ったんだろ？　いつも売切れの大人気パン。我慢しなくてもいいんだぜ」

にやにやとしながら悠音の肩に手を回す。まさかまた遙が写真をとろうとしているのではと思い辺りを見渡したが、遙の姿はなかった。どうやら自分の昼食を買いに行っているらしい……どころか、誰もいない。

「ほらほら、誰も見てないから。俺に忠誠を誓ってみろよ」

ちよつと待て、人がいないからって、この前よりも近いっつの！
悠音には息を止める事しかできなかった。このシチュエーションは危なすぎる！　でも、目の前にいるのが光だと思うと、拒否しきれないのだ。

「どうした？　――悠音」

ふいに名前を呼ばれて、悠音の心臓が跳ね上がった。どうしよう、ドキドキしてる……！

私、変だよ！

「……やっ」

やっと声が出た瞬間、教室のドアが開いた。

そこにはお約束のように、遙の驚いた顔。

「ひ、光……と、悠音……ちゃん」

口を押さえて立ち尽くしているかと思えば、遙は突然慌てて携帯を出し始めた。いや遅いから！　今更隠し撮りなんかしないでいいから！　つか前の写真だけで私は十分脅せるって！

光は悠音の肩を抱いていた手を戻し、遙の携帯を取り上げた。

「こら。これはゆすりネタじゃなくてプライバシーだ」

そうだったのかよ！

つかどっちにしろそういう事はヤメロ！！

はあ、と溜息を吐いて、光はパンを口に放り込んだ。

結局食うんだ、私のパン……。

「もう少しでこいつを永遠にパシリにできたのに」

もう少しじゃねえし。お前に忠誠を誓う気などこれっぽっちもな

い。

「最悪」

ほてった頬をパタパタと仰ぎながら、悠音は呟いた。光が振り返る。

「ふっ、大人しく俺に従ってればいいものを」

お前に従ってたら人生がどうなるかわかんないから。

「パシリになるのはゴメンだから」

「もうパシリじゃねえ？」

光がそう言くと、遙が携帯を取り出した。双子は侮れない……。悠音は精一杯の悪あがきとして、二人から顔を背けた。

第六話 キオク

走っている。

あの悪夢の日を、走っている。

「はっ……はぁっ……ふっ……っは……ッ」

息が苦しい。体力も限界だった。走っても走っても、逃げられるわけではないのに。

光は屋上へ転がり込んだ。

鍵が開いていた。倒れ込むようにコンクリートに身体を倒し、周りの無音にホッとする。

ふいに、ガサツと音が聞こえた。

反射的に身体を起こす。しかしそこにいたのは、あちこち破れたセーラー服を纏いボロボロになっている遙だった。

ボロボロ、といえば、光の学生服の方が酷い事になっているし、傷も多い。しかし光は自分よりも、遙が気になった。

「っ……はぁッ……はる、か……？ ……ッ」

まともに声が出ない。それでも遙は光に気付いたようで、声にならない声で大丈夫と返す。

そして、お互い安堵の息を漏らした。

「あっれえ？ ……こんなトコにいたよお？」

再び開いた扉の音と同時に、頭が痛くなるような声が響く。光と遙は同時に起き上がった。

「ダメだろー、逃げたらぁ！ 害虫に逃げる権利はねえんだよっ」

「あははっ！ 同感同感。殺してやろっか？ ゴキブリ殺したって罪にならないしさ」

二人は隅まで追いやられる。遙の手が、光の手を握った。

「なんなら土下座すれば許すかもねー」

「土下座より双子の熱烈キスシーンの方が見物じゃねえ？」

笑い声が上がる。相手の人数はどんどん多くなっていく。

「そんなキモいの見てられるかし。やっぱ殺そ？」

「抱き合いながら落ちてもらってもよくねー？」

それ傑作！ と、誰かが賛成する。

「どっちにしろさあ、目の前にいてほしくないっていうね」

「つか存在するなって感じ」

じりじりと、狭まる全員の間の距離。

誰か。

誰か、助けて。

タスケテクダサイ。

「死ねよ」

光は飛び上がるようにして、突然立ち上がった。

授業中だった。皆の視線が光に一斉に集まる。光は辺りを見渡し、自分が居眠りをしていたと知ると、頭を押さえて席についたのだった。

「どうしたのよ？」

授業が終わり、皆が席を立って友達と話し始めた頃、悠音は光の席の前に立った。光が居眠りをしていたのも珍しいが、うなされてた上に突然立ち上がったのだ。

「いや……別に」

光の機嫌はかなり悪かった。後から聞いた話だが、さっきの瞬間、隣のクラスでも遙が同じ行動を起こしたらしい。

全く、双子は怖いな。侮れないわ。夢も共有してるんじゃないかと、本気で疑いたくなる。

肘についてどこか遠くを見つめる光に、悠音は溜息を吐く。

「ちよっと嫌な夢……見ちゃって」

と、遙は言った。どうせ光もそんなもんだろ。んでもって同じ夢なんだろう。まあこれは私の予想であって、確証はないのだが。

「そっか。それにしても珍しいね、二人が居眠りなんて」

「ん……なんでだろ……」

そう言って遙はカレンダーに目を移した。そして少し目を伏せて、悲しい表情を見せる。

「あれから、一年……経ったんだ……」

誰にも聞こえない声で、そう呟いた。

しかし次の瞬間には明るさを取り戻して、

「大丈夫だよ悠音ちゃん、光もすぐに忘れるよ！　ところで次の時間、プールだよね？」

いつもの話題に戻ったのだった。

遙は隣にいる光にも顔を向けて、

「ねっ？」

と話をふったが、光はただ気力のない顔をして頷いただけだ。

ああ、もう！　苛々するわね。

悠音は光を一発殴り、胸倉を掴む。遙が息を呑んだが、関係なし。

「うじうじしてんな！　ボケ！」

びっくりしたような光の表情。それがやがて、いつもの色を取り戻した。

皮肉な笑みを浮かべて、

「……ふん、パシリに指図されるほど落ちぶれてねえよ」

うん、それを聞いて安心したわ。いつもの光ね。今のムカつく言葉は聞かなかった事にしてあげる。

遙がにこっと笑った。

そして、いつもの視聴覚室の後しばらく経って光は男子更衣室へ、遙は悠音と女子更衣室へと別れたのだった。身体検査やプールは二クラス合同だから、女子更衣室にも一クラス分の人数がいる。

スクール水着ってやっぱりダサイわよね？

それでも可愛く見える遥って一体……。

皆にまな板だのなんだのといじられながら、遙は顔を真っ赤にし

つつも楽しんでるようだ。

あまり皆は遥とはしゃぐ機会がないものね。ゴメン、私が独り占めしてるからね。

まあなにはともあれプール、うん、まんざらでもないわ。水は好きだし暑いし。

ただ男子に水着姿を見られるのが一番嫌だけどね。それを気にしてるんだかなんとか、皆は自分を足が太いだの胸がないだの肌が黒いだの、人を肌が白いだの足が細いだの。騒いでたって身体は変わらないわよ。私はそう確信する。

しかしこう見ても、遥が一番可愛いわ。これで胸があったらモデルになれる。いや……一つの欠点が逆にいいのかも、って、私は誰だ。

なんだかんだでキャーキャー騒ぎつつ、ついに全員プールサイドに上がった。水着の帽子はダサイけど、仕方ない。シャワーは冷たいし消毒も地獄だけど、私はこの授業、嫌いじゃない。

男子は既にプールサイドに揃っていた。鼻の下をのぼすような変態はいないようだ。もっとも私達じゃ欲情もしないってか？ 失礼な。

女子は皆してヒソヒソと話をしていた。その内容は回り回って私の元にも届く。

「やばい、光くんカッコよすぎ」

……やっぱりその内容ですか。

私はあえてその話題を出さなかったのよ？ でも、無視できない事実。

一人だけ細くてスタイルよくて。ムカつくわ。あんなに性格悪いくせに。

悠音は光から目を逸らす。遥と目が合った。その微笑みに、思わず頬が緩む。

やっぱり光とは違うわ。

顔か性格かって言ったら、性格をとるわよ私は。ルックス重視の

愚者どもよ、後で後悔しろ。

夏の日の騒がしい一時間ないし五十分は、こうしてあっという間に過ぎるのだった。

第七話 フキゲン

林間学校、というものに楽しい思い出はなかった。

悠音は中学二年秋の林間学校が近付くにつれ、日々テンションを落としていった。無論、殆どの人はそんな悠音の心の内など知る由もないのだが。

そして転入してきたばかりの双子には尚更、それは分かるはずもない。

「ゆ、悠音ちゃん、暗いよ」

遥のおどおどした声に、悠音は暗鬱としたオーラを発しながら振り向いた。

「……何か用？」

返事もそっけない。遥は首を竦める。

「用があるわけじゃ、ない、けど……」

「あっそう」

真っ黒な空気が漂う。遥は涙目で小さく謝った。ハタから見れば喧嘩に見える。周りの視線が集まった。

もちろんその視線の中には光のものもあって、悠音と同じクラスの光は彼女の機嫌が悪い事を朝から知っていたのだが、さすがに遥の涙を見ると腹が立つようで、人込みを割って入ってくると、悠音の後ろ襟を引っ張った。

「何すんのよ」

「てめえが何してやがる」

低い声で呟き睨み合う二人。遥が慌てて間に入った。

その瞬間、

「やめなよ」

凜とした声が響き渡る。もちろん、遥の声ではない。三人が振り返った先には、光と悠音と同じクラスの女子がいた。

「悠音はさ——」

涼しい表情で続ける彼女。

「林間学校が嫌いなんだよ」

その瞬間、全てが静まり返った……。のは、光の気のせいだろうか。光はおもむろに悠音に顔を向け、不機嫌極まりないその顔を見つめる。

「……って事はお前……林間学校が嫌だからってイライラしてただけなのか……？」

ふざけんな。

光は最後に口の中だけで、そう付け足した。

ムスツとした悠音の顔にデコピンを喰らわせる。悠音はむう、と声を漏らして、光を見上げた。

遥は光と悠音を交互に見つめている。さっきの女の子はもう背を向けて、その場から去っていた。

「なんかムカつくな。全部話せ」

自分の秘密は隠したがるくせに、人の事は色々と聞きたがるらしい。

否定しかけた悠音も、再び写メの脅しといういつものパターンで口を開く事になったのだった。

「小学生ん時の林間学校で登山中にさあ……」

トラウマの内容は案外馬鹿らしい話だった。道草をくっていたらいつのまにか皆とはぐれ、遭難しかけたというのだ。

ふざけんな。

光は心の中で繰り返す。

「今回は大丈夫だよ」

遥がニツコリと笑って言った。

「ボク達がそばにいるから」

悠音は遥の優しさに涙ぐむ。そこに、光も口を出した。

悠音の背に手を回して、

「そうだな。ま、万一遭難しても俺が一生面倒みてやるよ」

「お前と一緒になんか山登るかッ！ 先行ってろ！ 私に構うな、つか近いッ！！」

さっきまで暗かった顔が真っ赤になる。いつもの調子を取り戻したようだ。

光は悠音から離れて、鼻で笑うと教室に戻って行った。

何があるか分からない林間学校まで、残り三日だ……。

ああ、もう。

ただでさえ嫌な林間なのに、光と同じクラスだとまた一騒ぎ起きそうダッ！

しかし時の流れてるのは残酷なもので、三日なんてあっという間に過ぎてしまうのだった。

そしてもっと残酷なのは運命とか偶然とか。バスでの隣の席が光だというのはまさしくその中の一つだ。

「よろしくな、前野」

嫌な笑みを浮かべる光。人通りの少ない帰り道だからって、ちょ、また顔近いし。

「離せ変態めっ！」

遥は相変わらず助けてくれないようだ。悲しいわ。

「失礼な奴だな」

舌打ちして悠音から離れると、光はまた歩き始めた。遥はさも可笑しそうに、クスクスと笑っている。

何が面白いんだか……っ！

光は慣れてるのかもしれないけど、私はあんなに顔が近いと驚くのよ！ 言っとくけど、キスなんかした事ないんだからね！

挨拶でもした事ない。日本人よ、私は。

「あのさ、悠音ちゃん。旅館の部屋どこ？ ボク、遊びに行っていない？」

話を逸らす遥には笑みを向ける。俺も遊びに行くとかほざき始めた光には眼光を飛ばすだけ。

「いいよいいよ、私は202だから。遥は四組だから近いわよね？」

「うん、ボクは210。悠音ちゃんも遊びに来てね」

はにかんだ笑顔がなんとも愛らしい。

「俺は303」

「だから何よ」

同じ顔なのについ扱いに格差が出るわね。

光に部屋番号を聞かれたのは間違いだったかもしれない。あいつなら来かねないからだ。

なんだかんだ言っただけで女子が集まってくるしな。

「てめえ、俺と遥に対する態度がずいぶん違うねーか？」
当たり前だろ。

「あんたに優しくしてたらどんな調子の乗り方するかわかんないわ」
「光はオレサマだからしょうがないよ……許してあげて？」

珍しく遥は口を出す。

遥が言うなら許してやってもいいわ。

悠音は口を閉ざした。

光は溜息を吐いて先を行く。その後には遥、そして悠音。

夕焼けをバックに、三人は歩いていった。この時だけは、悠音は林間学校の恐怖を忘れていたのだが。

今年も登山がある上に、嫌な奴がいる。そして中学生だからって、登る山がこの前よりもハイレベルなのだ。落ちたら一たまりもないだろう。まあ、それは前の山も同じだが。

「林間学校、どうなるかなあ……」

楽しみと言わんばかりの遥の声が、悠音の恐怖を煽った。

そして光はと言うと、

「お前を突き落としてやる」

とかガキのような言葉を吐き捨てていたのだった。

林間学校まで、あと一日。いや、あと半日もない。

第八話 リョコウ

「あぁっ！ 筆箱忘れた！」

悠音が叫んだ時、既にバスは高速道路に入っていた。

周りからクスクスと笑い声上がる。もちろん光は嫌味たっぷりの顔で馬鹿にした言葉を吐いた。

心配そうな表情を見せるのは遙だけだ。悠音は顔を真っ赤にして、押し黙る。

「林間が嫌いなのは自分のせいじゃねえのか？」

「うるさいわね……これは、関係ないわよ」

そう言って、一睨み。

光はクククッと笑って、また顔を窓の外へと向けた。

「悠音ちゃん悠音ちゃん、言ってくれば鉛筆、貸すからね」

相変わらず優しい遙に、悠音は笑顔で礼を言う。

再びバスの中のざわめきに、三人はそれぞれ溶け込んで行くのだった。

「……か……るか……」

暗闇から、覚えのある声がする。

「遙！」

「はひっ!？」

ガバッと遙は跳び起きた。目の前には、必死で笑いを噛み殺している光がいる。

自分がいつしか眠っていたのだと気付くまでに、数秒かかった。

「あ……ボク……寝てた？」

「ああ。それはもうぐっすり」と

柔らかな笑みを見せて、光はバスの外を指差す。

「着いたぜ」

バスの外は絶景だった。

まだ紅葉になりきれしていないが、それでもこんなに大きな山は、
迫力がある。

しばらく呆然としていた遙は、手ぐしで髪を整え、皆の元へ走り
だした。

「かなりグッスリだったね」

悠音は強張った笑顔で、そう言った。

癒しの木々は、もはや悠音にとってはトラウマをこじ開ける鍵に
しかない。

しかし頑張って笑みを作っている悠音はすごいと思う。

「えへへ……」

遙は小さく笑って、大空を見上げた。

吸い込まれそうな青。

そして揺れる葉の緑に混じった朱と黄。

「すごいね」

「……うん」

二人はしばらく辺りを見回していたが、光の「置いてくぞ」とい
う大声に、再び歩くペースを速めたのだった。

「この木って何の木？」

恐怖感を振り払うためか、悠音はしきりに質問していた。

光はあきれたように息を吐いて、

「何ってお前、イチヨウの葉も見た事ないのかよ？」

顔をしかめる。

「イチヨウかあ、そうかそうかなるほどね」

納得した様子で頷いてはいるが、きっとわかっていないだろう。
またイチヨウの木を指差して、『何の木？』と言うに違いない。

「んじゃこれは何の木？」

案の定、悠音はまたもイチヨウに指を指した。

「悠音ちゃん、さっきと同じ種類の木だよ」

遙は楽しそうだ。あちらこちらを見渡しながら、たまにこちらを

向いて笑う。

「本当にバカだな、お前」

「バカはあん——」

バカはあんただなどとは、到底言えなかった。

口をつぐんだままの不機嫌な表情で、悠音は光を睨む。

会話が続かない。唯一言える言葉と言えば、光が勝ち誇った顔をして悠音を見下している事について、だ。

「うざ……」

思いつ切り顔を歪ませる。

遥がクスツと笑った。光は鼻で笑い遥の肩を叩いて先を促すと、悠音を置いて先に進もうとする。

「あつ、ちょっと！ 待ちなさいよ！」

「いつも言ってるだろ。俺に忠誠を誓ったら言う事聞いてやるって」いつも言ってるのは知っているが、まともに聞いた覚えはない。

聞き流している。

当然、今回も。

「遥、あんたどっちの味方なの」

わざわざ遥に話を振る。遥は少しだけ考えるそぶりを見せてから、満面の笑みでこう言った。

「ボクはいつだって、ボクの味方だよ」

そりゃそうでしょうよ。

悠音は「聞いた私が馬鹿だった」と息を吐く。

「あれ？ 悠音ちゃん、ボク何か、間違った事言ったかな？」

相変わらずの素晴らしき笑顔。

今私の中に、確かな殺意が芽生えたわ……。

まあ、光には劣るけど、ね。

「もーいい……」

悠音は足を進めた。慌てて追い掛ける遥……と、さりげなく悠音をも抜かそうとしている光。

「そこの三人！ 早くしなさい！」

教師の言葉が聞こえた瞬間、三人は一斉に走りだした。

「ちよっと、私が先に走り出したのよ！」

「お前が足遅いのが悪い」

二人は押し合いながら駆けるが、その横を何事もなかったかのように遥が通り過ぎる。

叫びながらそれを抜こうと二人が必死になっているが、結局皆の元に1番に着いたのは遥だった。

「は、遥ッ、てめ！」

息を切らしながら言う光。悠音は顔を真っ赤にして、空を睨んでいる。

「ボクは争いが嫌いなんだ」

えへ、と遥は顔を赤らめた。

三人はまさにトラブルメーカー、と言うべき存在だったろう。

皆は既に呆れた表情をして、立ち尽くしていた。

グチを零している生徒もいる。

「うるせえよ」

光が吐き捨てた。一瞬にして白ける。やっぱり違うわね、人気者の一言は。

気まずいその場の雰囲気の中、ケタ外れに明るい教師の声が響いた。

「ほら、宿が見えましたよ！」

大自然の中で一つだけ目立っている、人工の建物。高く聳えるそれは、都会には不似合いで自然の中には浮いている。

「おお」

わざとらしい歓声が上がった。

感動、の声ではない。ただこれ以上歩きたくないという心からの、安堵の声だった。

ただ、その宿が思ったよりも古びていたというところは、少なくとも歓声の質に影響を与えていたのだろうが。

とにかく、着いたのだ、宿に。

始まったのだ、林間学校が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6654c/>

自分はここにいる

2010年12月19日01時28分発行